

K-782

吉原 VII 遺跡

住宅団地造成工事に伴う
発掘調査報告書

2002

東北ミサワホーム株式会社
松田建設株式会社
山形市教育委員会

吉原 VII 遺跡

住宅団地造成工事に伴う 発掘調査報告書

平成14年 3月

東北ミサワホーム株式会社
松田建設株式会社
山形市教育委員会

序

本書は、平成13年度に実施された、吉原Ⅶ遺跡の発掘調査の結果をまとめたものです。

吉原Ⅶ遺跡の所在する山形市大字吉原は、山形市の南部に位置しており、近年大規模土地区画整理事業が推進され市街地化が進んでいる地域です。この地区には、本遺跡のほか、若宮の楯、吉原Ⅰ～Ⅵ遺跡が確認されており、土地区画整理事業に関連して、数回にわたり調査が実施されています。

山形市内には、国指定史跡「山形城跡」や「嶋遺跡」をはじめ、約300箇所の埋蔵文化財を包蔵する遺跡が確認されています。これらの遺跡は、郷土の歴史や文化を正しく理解する上で、欠くことのできない市民共有の歴史的財産となっています。

こうした状況のもと、近年は市内各所において、住民福祉の向上を目的とした各種の社会整備に関する開発事業が増加しており、埋蔵文化財保護との調整の結果、遺跡の発掘調査に至る場合が多くなっています。また、史跡「山形城跡」の保存や整備を目的とした発掘調査も継続されているところです。

本書が、埋蔵文化財の保護と啓蒙のために、そして、皆様の郷土史探求の一助としてご活用いただければ、誠に幸いです。

最後になりましたが、調査にあたって、埋蔵文化財の保護に特段のご理解をいただき、発掘調査に多大なご協力をいただきました事業者や工事関係者の皆様並びに関係各位に、厚く御礼申し上げます。

平成14年3月

山形市教育委員会
教育長 相田良一

例 言

- 1 本書は、(仮称)坂巻団地造成工事に係る「吉原Ⅶ遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 調査要項は下記の通りである。

遺 跡 名 吉原Ⅶ遺跡 (よしはらなないせき)
所 在 地 山形市大字吉原字坂巻276番地 他
遺 跡 番 号 平成11年度新規発見
現 地 調 査 平成13年7月2日～平成13年7月27日
整 理 作 業 平成13年8月20日～平成13年9月28日
調 査 面 積 500㎡
調 査 主 体 東北ミサワホーム株式会社
調査実施機関 山形市教育委員会
調 査 担 当 者 社会教育課 課 長 柳橋 幸男
課 長 補 佐 金子 美則
文化財保護係長 江川 隆
主 事 國井 修
主 事 須藤 英之

調 査 協 力 松田建設株式会社

- 3 本書の作成・執筆は、國井修が担当した。
- 4 発掘調査及び出土遺物の整理にあたっては以下の方々からご協力をいただいた。記して感謝申しあげる。(敬称略)
小笠原吉二 岸野松雄 栗原清子 栗原武夫 笹利幸 佐藤博 白田敬 鈴木清志 丹野ヒデ子 丹野廣
土門弘 中村光作 前野勲 町田雅樹 (以上現地調査)
笹原陽子 鈴木麻理子 深瀬美貴子 (以上遺物整理)
- 5 出土遺物、調査記録類については、山形市教育委員会で一括保管している。

凡 例

- 1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は以下の通りである。
SD：溝跡・溝状遺構 P：土器 S：礫
- 2 遺構番号は現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。
- 3 遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は真北を示している。
- 4 グリッドの南北軸は、N-25° - Eを測る。
- 5 遺構実測図は、1/40・1/60・1/80・1/200の縮図で採録し、各々スケールを付した。なお実測図中の遺物出土地点の記号は以下のとおりである。
▲：須恵器坏 △：須恵器甕 ■：土師器不明 □：土師器甕 ●：土師器（赤焼土器）坏
○：土師器（赤焼土器）甕 ×：内黒土師器坏
- 6 遺構実測図中の水糸レベルは標高を表す。単位はmである。
- 7 土層観察においては、遺跡を覆う基本層序については、ローマ数字を、遺構覆土についてはアラビア数字で表している。
- 8 遺物実測図・拓影図は1/3の縮図で採録し、各々スケールを付した。
- 9 遺物実測図中の土器については、断面黒ベタが須恵器、網点が土師器（赤焼土器）、白抜きが土師器を表す。
- 10 遺構観察表中において、（ ）内数値は現存値を示す。単位はcmを使用している。
- 11 遺物観察表中において、（ ）内数値は図上復元による推計値を、“-”は計測不能を示す。単位はmmを使用している。
- 12 遺構・遺物番号は、本文、表、挿図、写真図版とも一致している。
- 13 基本層序及び遺構覆土の色調記載については、『新版土色帳』（小山・竹原：1973）に拠った。

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の方法と経過	1
II 遺跡の立地と環境	
1 地理的環境	4
2 周辺の遺跡分布	4
III 検出された遺構と遺物	
1 遺跡の層序	9
2 遺構と遺物の分布	9
3 溝跡およびその出土遺物	9
IV 総括	
1 SD1溝跡出土遺物について	22
2 調査の成果	22
報告書抄録	24

表

表1 調査工程表	2	表4 遺物分類表	20
表2 周辺遺跡の年代	6	表5 SD1遺物観察表	21
表3 吉原遺跡群の時代区分	8		

挿 図

第1図 グリッド設定図	3	第6図 SD1平面図	13・14
第2図 遺跡位置図	5	第7図 SD1遺物出土状況図	15・16
第3図 地形分類図	7	第8図 SD1断面図	17
第4図 吉原遺跡群位置図	8	第9図 SD1出土遺物(1)	18
第5図 遺構配置図	12	第10図 SD1出土遺物(2)	19

図 版

図版1 遺跡遠景・SD1完掘状況、断面	図版4 SD1遺物出土状況
図版2 SD1断面、遺物出土状況	図版5 出土遺物(1)
図版3 SD1遺物出土状況	図版6 出土遺物(2)

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

吉原Ⅶ遺跡は、平成11年度に新規に発見された遺跡である。本遺跡が所在する大字吉原地区において、株式会社東北ミサワホームによる住宅団地造成工事が計画されたのをうけ、工事の実施機関である株式会社松田建設と本市教育委員会とで協議を行った。その結果、事前に埋蔵文化財の有無についての調査を実施することとなった。

本市教育委員会では、平成11年11月に、事業計画地の現地確認を実施し、同年12月1日に事業者より埋蔵文化財の有無についての照会がなされたのをうけて、同年12月20日から22日にかけて、重機及び手掘りによる試掘調査を実施した。

試掘調査は、事業計画地内に任意に16箇所の試掘坑を設定し、重機及び人力により、地山面までの掘り下げを行い、遺構・遺物の有無の確認を行った。調査の結果、計画地北側の竜山川左岸の台地状の部分で、9世紀中葉から後葉にかけての遺構・遺物が確認された。その他の部分については、表土直下が旧河床と判断される砂礫層になり遺跡は所在しなかった。よって、遺跡は、上記の台地状の部分にのみ広がり、その他の部分は、須川及びその支流の旧川床となることが確認された。また、遺跡の所在する高位部分についても、その形状及び付近住民からの聞き取りにより、過去に切土が行われ、人為的な地形の改変がなされていることが確認された。

以上のような調査結果を、平成12年1月6日に事業者へ回答し、事業実施の際には、文化財保護法に基づく保護措置が必要な旨通知した。また、同日文化庁へ新規遺跡発見の届出を行った。

平成13年に、遺跡範囲部分について工事が計画され、事業者と本市教育委員会とで協議した結果、遺跡範囲のうち、事業計画地にあたる部分については、1m程度の切土が避けられないことから、事前に緊急発掘調査を実施し、記録保存を図る運びとなった。

2 調査の方法と経過

現地調査は、平成13年7月2日から同年同月27日まで延べ26日間（実働16日間）実施された（表1）。7月2日から重機による表土除去を開始し、これと並行して人力による遺構検出作業を行った。表土は10～15cmと非常に薄く、調査区全域において耕作による削平がなされていた。5日には、遺構検出作業が終了した。その結果、試掘調査時に確認した平安時代の溝跡1条（SD1）のほか、溝跡、土坑、柱穴、杭跡が検出された。調査区縁辺部については、切土がなされており、遺構は検出されなかった。また、調査区北東部、畑の縁辺にあたる部分についても、当初は調査を予定していたが、遺構検出段階で、攪乱と確認されたので、調査区から除外した。

5～9日にかけて、事業計画地境界杭を基準に、5m×5mのグリッドを設定し（第1図）、6日より遺構精査作業を開始した。SD1を除くすべての遺構については、堆積土の観察及び元地権者からの聞き取りから、耕作による攪乱と判断されたので、半截段階で精査を終了した。

SD1は、はじめに、土層観察を目的としたトレンチを3箇所設定し、地山までの掘り下げを行った。その結果、3層の堆積土が確認され、その最上層（F1）が遺物包含層で、それ以下の層については、ほとんど遺物を含まないことが確認された。



第1図 グリッド設定図

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

山形市は、山形県の東部に位置し、宮城県と境を接する。山形盆地の南部にあたり、東には奥羽山脈が連なり、南部と西部は白鷹丘陵が裾野を広げている。奥羽山脈に源を発する馬見ヶ崎川が、南西部から北西へかけて北流し、南東から北西に伸びる扇状地を形成し、また、周囲の山々から流下する大小の河川が小規模な扇状地をつくり、複合扇状地を形成している。市西部には、山形市内で最大の河川である須川が、北流している。その沿岸には、自然堤防および後背湿地が広がり、その左岸には低位の河岸段丘形成されている。これら河川の間は、沖積平野が広がり、部分的に旧自然堤防に由来する微高地が点在する。

吉原Ⅶ遺跡は、山形市の南部、大字吉原字坂巻に所在する（第2図）。遺跡は、馬見ヶ崎川が形成した扇状地の扇端部から平野部にかかる部分に位置し、竜山川の左岸にあたる。遺跡周辺は、北東から南西へ緩やかに傾斜し、標高は約119mを測る。地目は畑地である。また、現在三方を河川に囲まれた舌状台地状を呈しているが、旧地形図および地元住民からの聞き取りにより、北側を西流する竜山川が、かつては本遺跡の南方を流れていたことから、本遺跡は北側に位置する吉原遺跡群と同一の地形的まとまりをもっていたと判断される。また、周辺工事の際に、竜山川の現流路沿いの土層を観察したところ、調査区と同様の地山層が、緩やかに傾斜しながら西方へ約50m伸びることを確認している。東側については、奥羽本線敷設の際に土砂採取が行われており、かなりの削平を受けている。

遺跡北側を西流する竜山川は、遺跡西方約1.5km付近で、山形市を北流する須川と合流する。須川は、奥羽山脈、白鷹丘陵から流下する大小の河川を合わせながら、最上川に合流する。遺跡周辺には、竜山川の他、坂巻川、鳴沢川が西流し、遺跡南方約600mで須川に合流し、須川と龍山川の合流地点付近には、白鷹丘陵から北流する花川、本沢川が合流している。このように河川の合流地点に近接し、また本遺跡所在する地域の小字名である坂巻の他、隣接する地域では河原前といった小字名もあることから、度々河川の氾濫に見舞われたことが伺える。文献資料からも、遺跡周辺の洪水を確認することができ、周辺河川に架橋されている、二つ橋、常盤橋等は、何度も架け替えがなされている。ちなみに、常盤橋は、現在昭和46年に完成した鉄筋コンクリート製の橋であるが、以前は五つ目の眼鏡橋で、明治16年7月中旬頃イザベラ・バードが工事現場に来訪し、その著書に当時の状況を記している。東側には旧羽州街道が走り、南方の須川右岸には、船着場があったとされ、近世には、水陸両面で交通の要衝として機能した地域である。

2 周辺の遺跡分布

山形市には約300箇所の遺跡が確認されており、その約半数が、古墳時代から奈良・平安時代の遺跡である。これらの遺跡は、山形市内においては、馬見ヶ崎川、須川、立谷川等の河川沿いに発達する自然堤防周辺及び、馬見ヶ崎扇状地扇端部周辺に数多く分布している（第2図・表2）。

本遺跡周辺および以南は、古代の遺跡の所在の密集地として古くから知られており、地元研究者や緊急発掘調査等により、資料の蓄積及び研究が比較的なされている地域である。特に、近年では、東北中央自動車道建設や、大規模宅地開発、土地区画整理事業等により、大規模な調査が実施されている。

大規模土地区画整理事業に伴い調査の実施された、吉原遺跡群では、奈良時代から平安時代を中心として、縄文時代から近世にかけての遺構・遺物が検出されている。特に、吉原Ⅱ遺跡では、8世紀末葉から9世紀初頭の直径約1mを測る掘り方を持つ掘立柱建物跡が確認されており、その規模及び配置等から、官衙的施設である可能性が検討されている。また、本遺跡南方約1kmの須川右岸に所在する成沢西遺跡でも、10世紀前葉の三面に庇を持つ大型の掘立柱建物跡が確認されている。

市域南西の丘陵では、東北中央自動車道建設及び大規模宅地開発に伴い、数基の窯跡の調査が実施されている。また、この地域は古くから窯跡の存在が知られており、昭和20年代後半から30年代にかけて山形大学により調査が実施されている。近年調査が実施された窯跡としては、オサヤズ窯跡、小松原窯跡がある。オサヤズ窯跡では、多量の布目瓦が出土し、竹状模骨平瓦も確認されている。小松原窯跡では、9世紀前半の須恵器窯である。これら窯跡の北方約2kmに所在する石田遺跡では、倉庫群と推定される多数の総柱の掘立柱建物跡が確認されており、物資の運搬や流通の面で興味深いものがある。



第2図 遺跡位置図（5万分の1）

表2 周辺の遺跡年代

No.	遺跡名	種別	年代	その他の時期・備考
1	吉原Ⅶ	集落跡	9C中葉	
2	吉原Ⅰ	集落跡	8C後葉～9C初頭	中世・近世
3	吉原Ⅱ	集落跡	8C末葉～9C前半	
4	吉原Ⅲ	集落跡	8C後半～9C前葉	
5	吉原Ⅳ	集落跡	8C末葉～9C前半	
6	吉原Ⅵ	集落跡	9C前半	近世
7	長苗代条里	条里	平安	
8	五日町	集落跡	奈良	
9	城南町一丁目	集落跡・城館跡	8C初頭～9C中葉	縄文(中期・後期前葉)・古墳(塩釜)・中世・近世
10	双葉町	集落跡・城館跡	8C後葉～9C中葉	縄文(中期・後期前葉)・古墳(塩釜)・中世・近世
11	山形西高敷地内	集落跡	9C後半～10C初頭	縄文(中期末葉・晩期後葉)・弥生(桜井)・古墳(塩釜)
12	青田	集落跡	奈良・平安	古墳
13	石コロ	散布地	平安	
14	神尾B	散布地	平安	
15	三本木窯	窯跡	9C末葉～10C初頭	
16	神尾C	散布地	平安	
17	神尾D	集落跡	平安	
18	成沢西	集落跡	10C前葉	
19	西の宮	集落跡	9C中葉	
20	樋渡	集落跡	9C	
21	塩辛田A・B	集落跡	8C末葉～9C前半	古墳(南小泉)・中世
22	館	集落跡・城館跡	平安	縄文(中期中葉)・中世
23	坊屋敷	集落跡	8C後半～9C前半	縄文(中期中葉・後期・晩期)・弥生(桜井)・古墳(塩釜)
24	大清水	集落跡	平安	縄文(後期)・弥生(桜井)・古墳(塩釜・南小泉Ⅱ)
25	金池	集落跡	平安	縄文(中期中葉・後期前葉・晩期前葉)
26	百目鬼	集落跡	9C後半	近世
27	鏡ヶ淵	集落跡	奈良・平安	
28	落合	集落跡	奈良・平安	古墳
29	前明石	集落跡・古墳	平安	弥生(桜井)・古墳
30	寺裏	集落跡	9C	古墳(塩釜・南小泉Ⅱ)
31	二位田	集落跡	8C末葉～9C初頭	縄文(中期後半)・弥生(桜井)
32	萩原	集落跡	8C中葉～9C前葉	古墳・中世
33	谷柏J	集落跡	平安	縄文(後期前葉)・古墳・中世・近世
34	上谷柏	集落跡	9C中葉	
35	沢田	集落跡	奈良・平安	弥生(桜井)・古墳
36	谷柏	集落跡	奈良・平安	古墳(塩釜・南小泉Ⅱ)
37	山形元屋敷	集落跡	平安	古墳(塩釜)
38	石田	集落跡	9C中葉	縄文(中期末葉)
39	高崎	集落跡	奈良	
40	高崎山	祭祀遺跡	平安	
41	古峯山	経塚	平安	別称「谷柏山経塚」
42	片谷地	集落跡	平安	
43	横手区	集落跡	奈良・平安	縄文(中期中葉)・古墳・中世
44	松原	散布地	平安	
45	オサヤズ窯	窯跡・集落跡	8C末葉	縄文
46	オミロク火葬墓群	墓	平安	(平成10年度登録抹消)
47	石原坂A	集落跡	平安	縄文(平成10年度登録抹消)
48	小松原窯跡群	窯跡	9C前半	縄文(早期末)
49	長者屋敷	窯跡・集落跡	平安	縄文
50	熊野堂	窯跡	平安	俗称「ガラミキ」
51	百々山	集落跡	平安	縄文(中期前葉)
52	風穴	洞穴遺跡	奈良・平安	縄文・弥生(桜井・天王山)・古墳・中世・近世

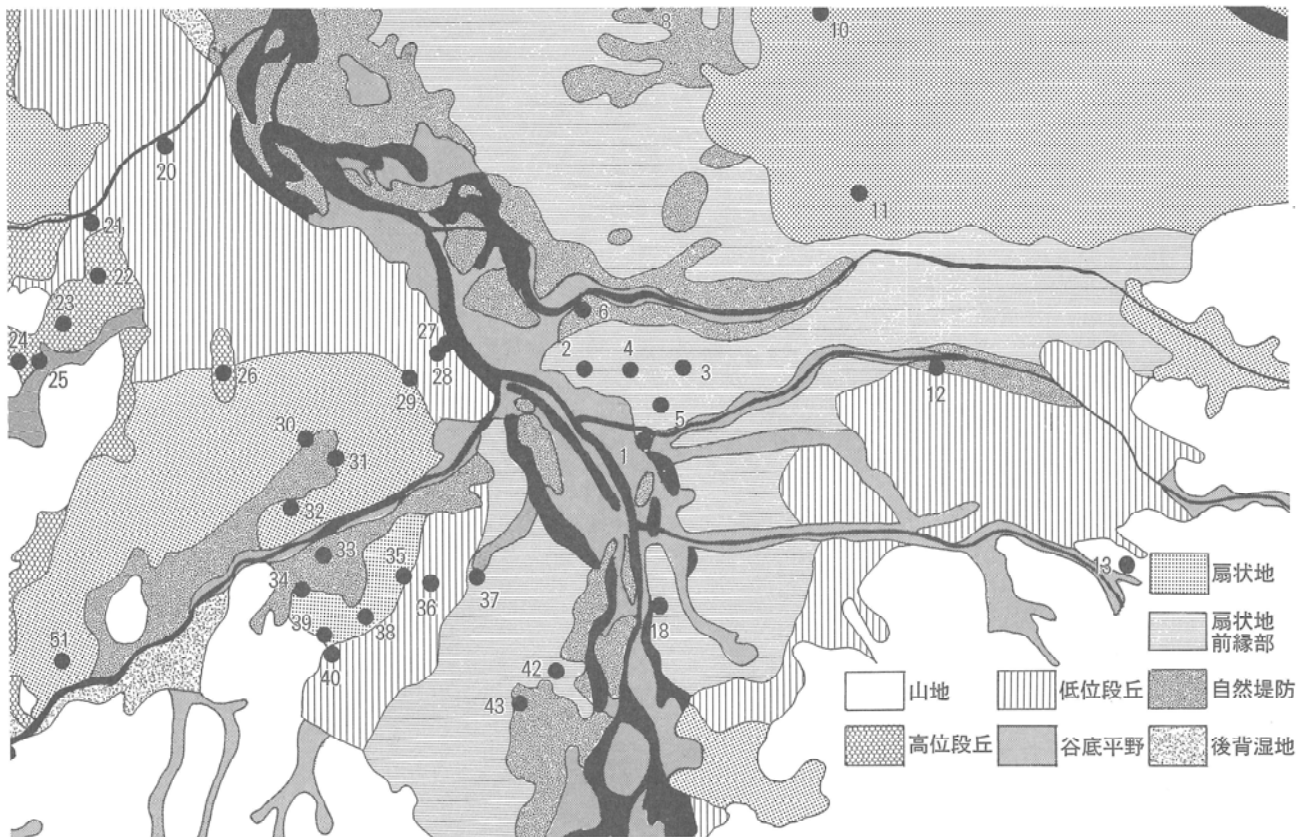
本市南部、須川上流域における奈良・平安時代の遺跡は、馬見ヶ崎川やその他の河川の扇端部から平野部にかかる部分、河川沿いの自然堤防部分、山地沿いの段丘面に分布する。これらの地域は、何れも、傾斜が3°未満の平坦地である。

奈良・平安期のみ遺跡については、扇状地扇端部から平野部にかけての平地部分に数多く分布している。凡そ、8世紀末葉から9世紀中葉までの時期のものが主体を占め、一部10世紀前葉のものもある。

それ以前の時代の遺跡と複合するものについては、河川沿いの自然堤防付近や、山地沿いの段丘面及び傾斜変換点付近に多く分布する傾向が認められる。

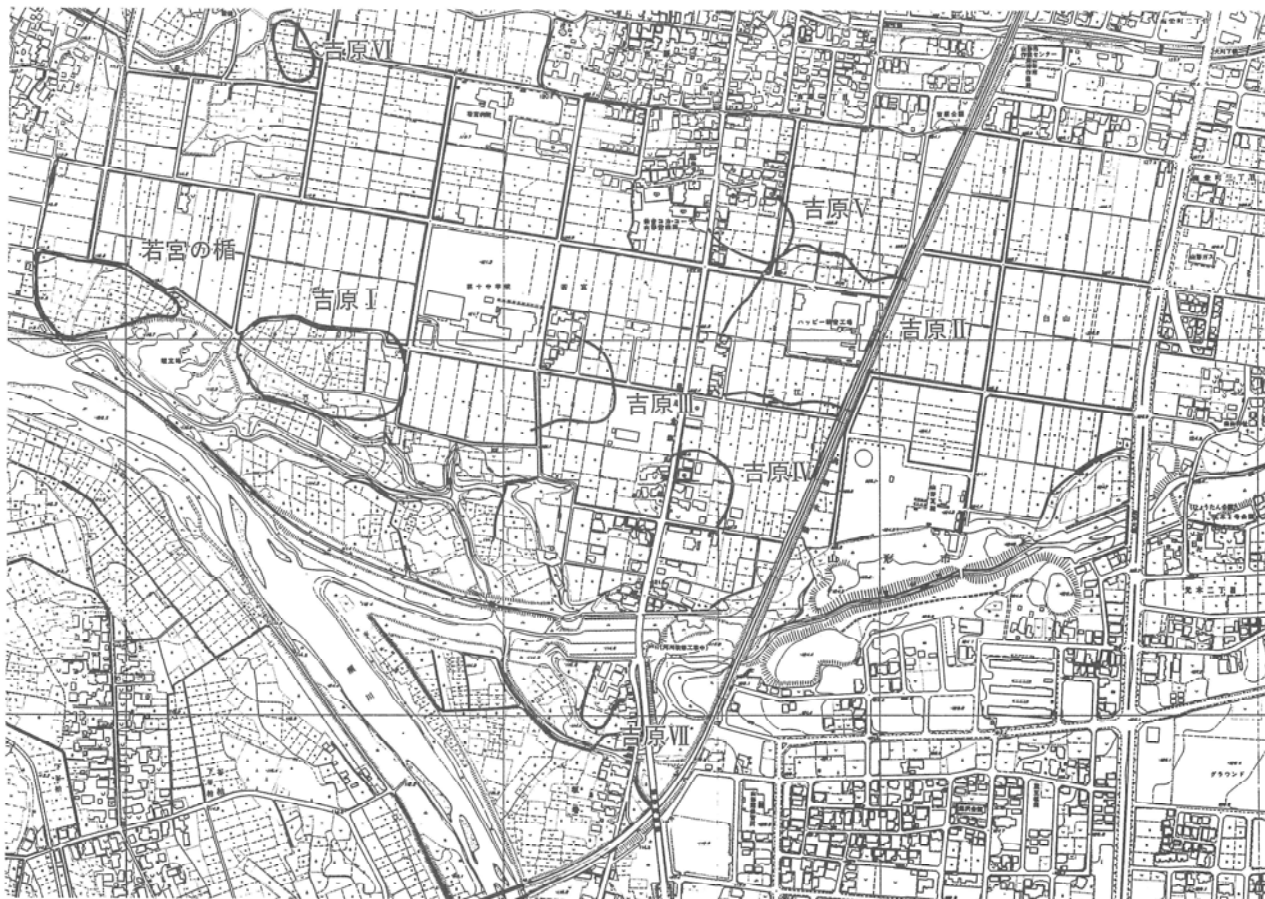
これらのことから、過去から現在への地形の変化等問題点も多く含むが、概況として、奈良・平安期には集落が沖積平野部分へ進出していくことが読み取れる。

また、奈良・平安期の遺跡については、河川及び旧河川に近接する遺跡では、掘立柱建物跡を主体とするのに対し、やや離れた地域に所在する遺跡では、竪穴住居跡を主体とするものが見受けられるようになる。河川別にみると、須川及びその支流では、掘立柱建物跡を主体とした遺跡が多く見受けられるのに対して、馬見ヶ崎川及びその支流では、竪穴住居跡を主体とした遺跡がその多くを占める傾向が認められる。但し、未報告の資料もあり、また、詳細な調査が実施されていない遺跡もあるため予察的な部分も多く含むことは否めない。



第3図 地形分類図（5万分の1）

吉原周辺の遺跡については、吉原Ⅰ～Ⅶ、若宮の楯、成沢西の9遺跡が確認されている（第4図）。そのうち、吉原遺跡及び若宮の楯は、前者が縄文時代中期、後者が中世の館跡であるので、主体となる時期が奈良・平安期の遺跡は7遺跡となる。本遺跡を除く6遺跡は、掘立柱建物跡を主体とした集落跡で、そのなかでも、吉原遺跡及び成沢西遺跡では、前述のように大型の掘立柱建物跡が検出され官衙的な様相を呈する。これらの遺跡は非常に近接した地域及び時代に存在し（表3）、集落の機能や居住域の変遷、集団の移動等の問題を考察する上での好資料であると考えられるが、未整理の資料が多く、いまだ不明な点が多い。



第4図 吉原遺跡群位置図

表3 吉原遺跡群の時代区分

遺跡名	8世紀				9世紀				10世紀			
	第1四半	第2四半	第3四半	第4四半	第1四半	第2四半	第3四半	第4四半	第1四半	第2四半	第3四半	第4四半
吉原Ⅰ												
吉原Ⅱ												
吉原Ⅲ												
吉原Ⅳ												
吉原Ⅵ												
吉原Ⅶ												
成沢西												

(注) 未整理の遺物もあり、遺跡の年代は暫定的なものである。

Ⅲ 検出された遺構と遺物

1 遺跡の層序

遺跡の層序は1層である。その直下が地山層となり、その上面が遺構検出面となる。

第1層は、暗褐色シルトの耕作土で、ほぼ一定の層厚をもち、地山の傾斜にあわせて厚みが増減する。

地山層は、褐色シルトのローム層である。ほぼ均質でやや砂質を帯びている。この層の上面が遺構検出面である。耕作により削平を受けている。調査区中央部がやや高く、縁辺部に向かって緩やかに傾斜する。

調査区の東側は、奥羽本線敷設の際の土砂採取により削平を受けており、今回の調査区と約1mの高低差を持つ。西側及び南側は、農地開発の際に土取りが行われて、西側部分では、その後約2mの客土が行われていた。

2 遺構と遺物の分布

今回の調査で確認された平安期の遺構は、溝跡1条のみである。その他の遺構は、近現代の耕作に係る杭跡や果樹の抜根跡である。溝跡は調査区の南端部に位置し、北側から同時期の遺構が検出されなかったことから、今回の調査区は、前述の通り周辺が削平されているにしても、遺跡の南端付近であると判断される。

出土遺物は、ほぼすべてが溝跡からの出土であり、その他は近現代の遺構に紛れ込んだものである。

3 溝跡およびその出土遺物

SD1 (第6～10図 図版1～6)

(位置・重複関係・遺存状態) 調査区南側E-6～F-9グリッドに位置する。調査区の南端に位置し、遺跡の立地する台地状の地形に合わせて弧状に伸びている。G-7グリッドで、サクラノボの抜根及びブドウ棚支柱掘り方により切られ、上面は耕作により削平を受けている。両端は、削平のため不明であるが、本来はさらに東西に伸びていたと推定される。

(規模・形態) 現存地で長さ約27m、幅240cm、深さ77cmを測る。両端は、過去の削平により、不明であるが、前述のように、さらに伸びていたと判断される。平面形態は南側に張り出した弧状を呈し、断面形は逆台形状を呈する。壁の立ち上がりは北側に比べ、南側がやや緩やかである。底面はやや凹凸をなすもののほぼ平坦である。全体的に東から西へ傾斜する。

(堆積土) 3層に区分し得る。F1は、黒色シルト層で、全体的にほぼ均質で、層厚はほぼ一定である。多量の遺物、若干の焼土・炭化物・砂を含む。焼土及び炭化物は、遺物出土地点に偏在する。自然堆積土を判断される。F2は、黒褐色シルト層で、F1との境界は起伏に富むが、G-8グリッド付近では安定する。小礫、砂、酸化鉄を含み、局所的に地山ブロックを含む。H-6・7付近で、微量の摩滅した数片の遺物を包含し、酸化鉄の割合が少なくなる。溝跡機能時には、水が流れていたと判断される。F3は黒色シルト層で、F2と地山の漸位層と判断される。層厚は変化に富み、まれに非常に摩滅した遺物を包含する。地山ブロック及び微量の酸化鉄を含む。

何れの層も、西側へ向けてやや厚くなるものの溝跡の傾斜に合わせてほぼ一定に堆積している。

Ⅲ 検出された遺構と遺物

層位	土色・土質	粘性	しまり	注 記
1	10YR2/1黒色シルト	強	強	全体的にほぼ均質で多量の遺物、若干の焼土・炭化物・砂を含む。焼土及び炭化物は、遺物出土地点に偏在する。上部付近は、検出面直下のため若干の植物根を含む。まれにこぶし大～人頭大の礫を含む。層厚はほぼ一定である。時間をかけて堆積した自然堆積土を判断される。
2	10YR3/1黒褐色シルト	強	強	直径2mm程度の礫及び砂を含む。多量の酸化鉄を含む。F1との境界は起伏に富むが、G-8グリッド付近では安定する。H-6・7付近では、直径2～15mm程度の地山ブロックを全体的に含み、稀に直径30mm程度の地山ブロックを局所的に含み。また、直径5mm程度の炭化物を含み、他の部分に比して酸化鉄の割合が少なくなる。その付近でのみ数片の遺物が出土する。水成堆積と判断される。
3	7.5YR2/1黒色シルト	強	強	直径2～5mm程度の地山ブロックを全体的に、まれに直径30mm程度の地山ブロックを局所的に含み。G-8グリッド付近では地山ブロックがやや大きくなる。一部酸化鉄を少量含む。層厚は変化に富む。まれにかなり摩滅した遺物を包含する。F2と地山の漸位層と判断される。
地山	10YR4/4褐色シルト	強	強	検出面付近では、耕作によりやや攪乱をうける。F2付近から床面にかけては、グライ化により白色を帯び粘性を増す(10YR7/1灰白色粘土)。H-6・7付近ではやや砂質を帯びる。ローム層。

(遺物の分類およびその出土状況) 出土遺物のほぼすべてがこの遺構からの出土で、その量は、整理箱にして2箱である。

山形県内の当該期におけるロクロ成形で内面に黒色ミガキを伴わない酸化焰焼成の土器は、一般に赤焼土器の名称が使用されるが、その定義がやや曖昧であることから、本書においては、土師器としている。但し、例言にもあるように、図上では表現方法を変え、観察表中ではカッコ書きを付してある。

出土量の傾向としては土師器甕類の出土量が最も多く、次いでロクロ成形の土師器坏類、須恵器坏類、須恵器甕類、須恵器蓋類、内黒土師器坏類、内黒土師器甕類、ロクロ成形の土師器甕類である。

焼成および成形技法、器種、口縁部～体部の形態、底部痕跡等により分類した(表4)。

須恵器坏・台付坏 (IA・IB)

坏身の形態で6類に分類した。

1類：1点のみの出土である(1)。底部のみ遺存していた。底部は、回転ヘラ切り後、ヘラケズリが施されている。他の坏類がすべてF1からの出土に対し、この遺物のみF2から出土している。

2類：図化したのは、3点である(2～4)。いずれも口縁部が欠損している。胎土は非常に緻密で、2、3は凝灰岩質砂をまったく含まず、4は他の類に比して小粒のものを微量に含むにすぎない。いずれも、見込み部分が摩滅している。H-6～G-8グリッドで出土し、個体としての出土位置は離れるものの、それぞれの破片は近接した位置で出土している。

3類：図化したのは、6点である(5～10)。粘土のよれが各所に認められ、非常に粗雑である。H-6～F-10グリッドから出土し、個体毎の破片はかなり離れている。

4類：図化したのは、2点である(11・12)。他のものに比して非常に大振りである。G-8グリッドから、ほぼ完形で出土しているが、11は体部に、12は底部中央部に敲打痕ともとれる痕跡があることから、何らかの廃棄行動の表徴かもしれない。

5類：図化したのは、4点である(13～16)。16は全体的に被熱し、摩滅が激しい。H-7～G-8グリッドから、個体としてはやや離れるものの、それぞれの破片は近接した位置から出土している。また、ほぼ完形で出土している。

6類：図化したのは、1点のみである(17)。胎土が他の類に比して非常に緻密である。H-7～G-9グリッドから出土し、かなり離れた位置で接合する。

土師器坏・台付坏（IIA・IIB）

坏身の形態により5類に分類した。

1類：図化したのは1点である（19）。内外面とも摩滅している。他の類に比して器厚がやや薄い、摩滅しているためであろう。G-8から、ほぼ一括で出土している。

2類：図化したのは1点である（20）。内外面とも摩滅している。その他の類に比して器厚が厚い。G-8グリッドからほぼ一括で出土している。

3類：図化したのは1点である（21）。低い付高台を付けた後に切り離し痕をナデ消している。他の類に比して、体部の傾きが大きい。G-グリッドから出土している。

4類：図化したのは1点である（22）。G-8グリッドから、ほぼ一括で出土している。

5類：内面に黒色ミガキが施されるものである。出土量は、僅少で、図化しえたのは1点である（23）。底部は欠損しており、外面が摩滅している。僅かに被熱する。H-7グリッドから出土している。

須恵器甕（IC）

須恵器甕類は、ほとんど出土せず、図示したもの他、数片があるにすぎない。器種により2類に分類した。

1類：図化したのは1点である（24）。長胴甕になると推定される。底部はやや凹凸があり、ナデや指頭痕等も観取されず、痕跡が不明である。底部付近にケズリ調整が施される。

2類：図化したのは1点である（25）。大甕と判断される。体部片のため法量はわからない。

土師器甕（IIC）

1類：SD1のほぼ全域から満遍なく出土する。破片数が多い割にほとんど接合しない。図化したのは2点（26、27）である。口縁部は内外面ともナデ調整が施される。体部外面に縦位のハケ目調整が施され、体部中頃に帯状に横位のミガキ調整が施される。体部内面の上半は横位のハケ目調整が施され、下半には施されない。

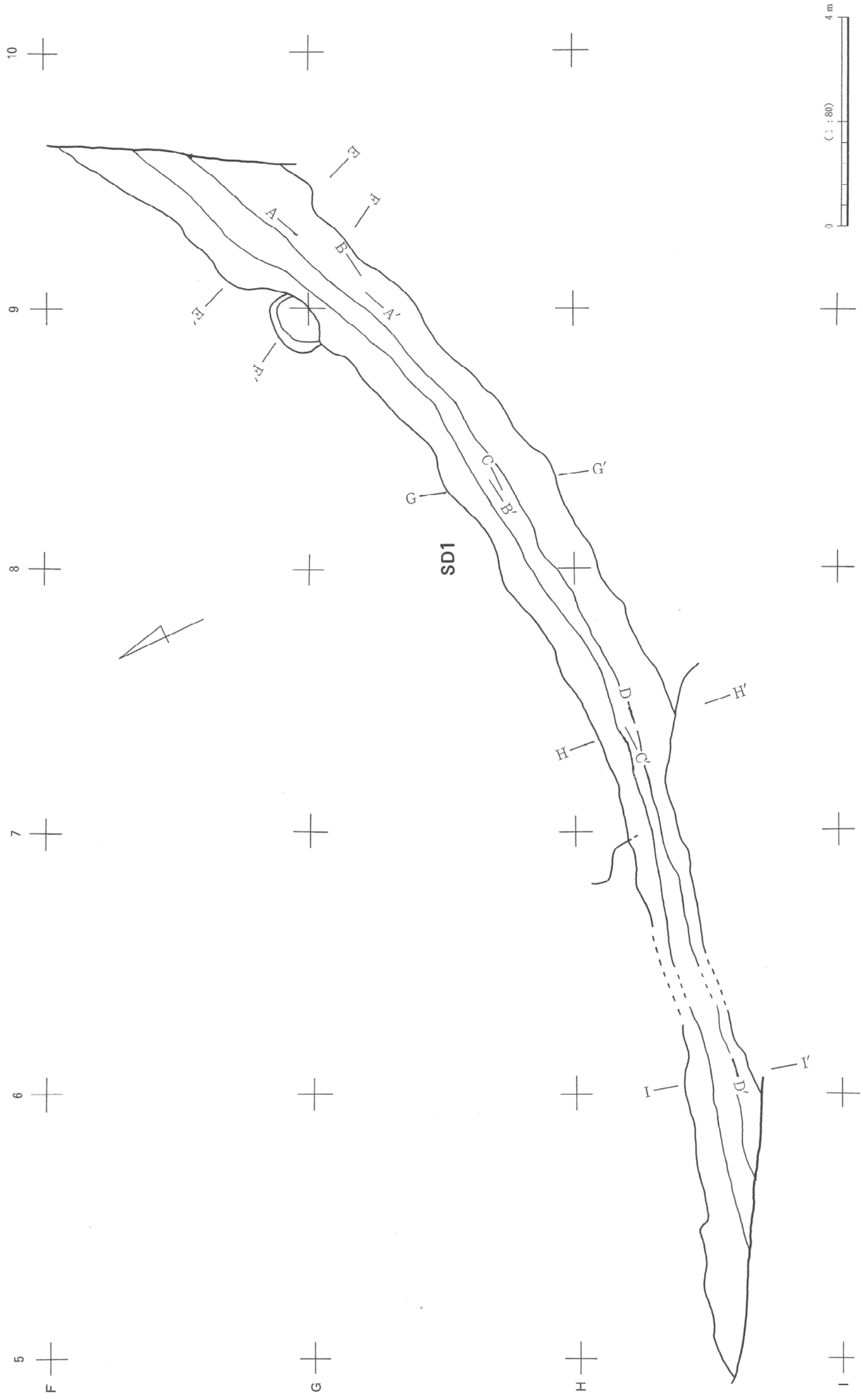
その他、深皿状を呈する器形の不明な須恵器（18）が出土している。胎土は非常に緻密で、須恵器台付坏IB6類に近似する。また、ロクロ成形の土師器（赤焼土器）の小型の甕も出土しているが、小破片で摩滅が激しく図化し得なかった。

坏類の分類と集中地点には、明確な相関関係は見出せなかったが、垂直分布では、IA1類～IA5類への変化が観取された。よって、肉眼では観察されなかったが、遺物包含層の堆積に何段階かの過程があったと判断される。

（機能および年代）周辺から建物跡等の居住に係る直接的な遺構が確認されないこと及び周辺の地形観察から、遺跡範囲の境界に位置する区画溝的な機能を有していたと判断される。出土遺物の特徴から、9世紀第2四半期～第3四半期を下限とする。



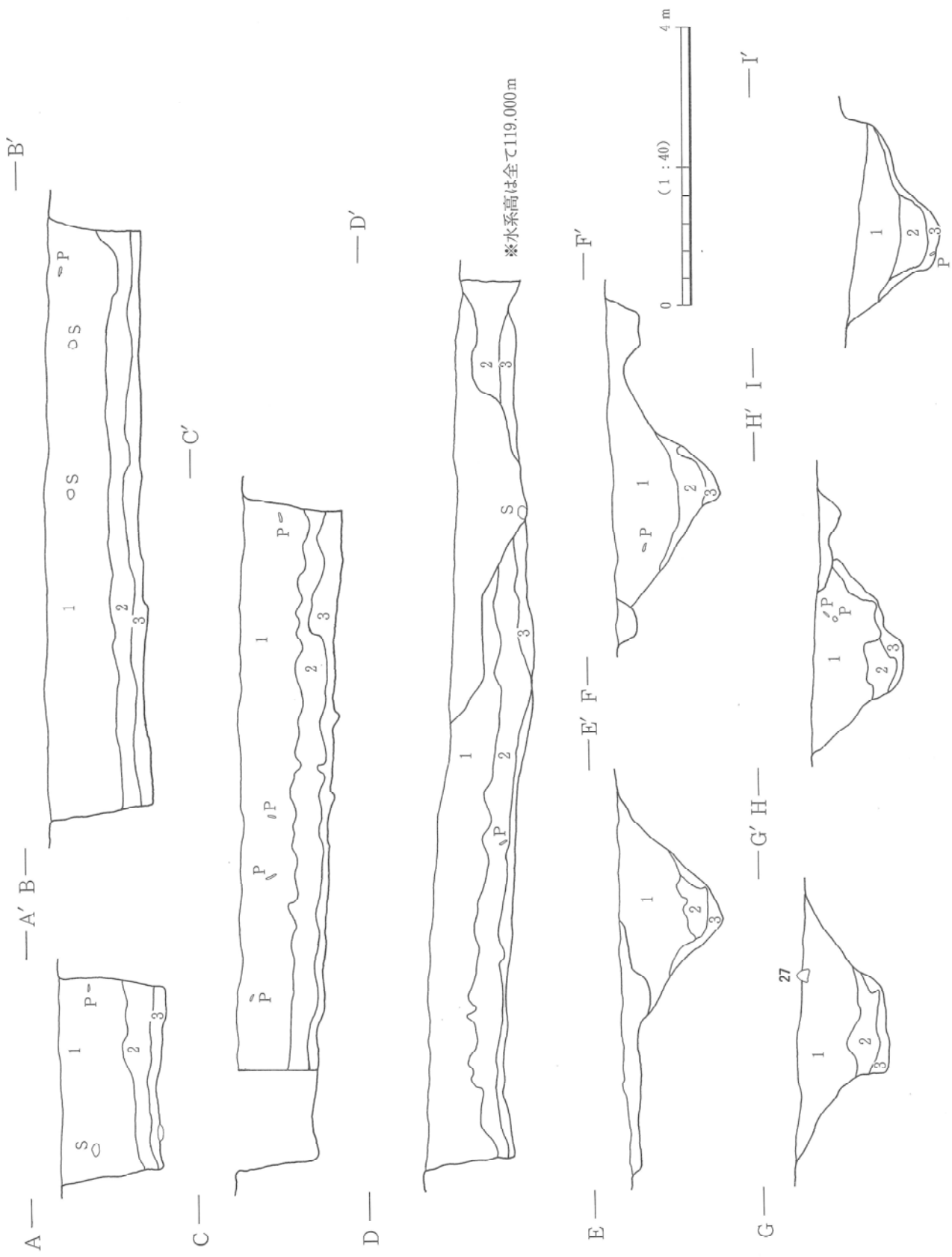
第5図 遺構配置図



第6図 SD1 平面図

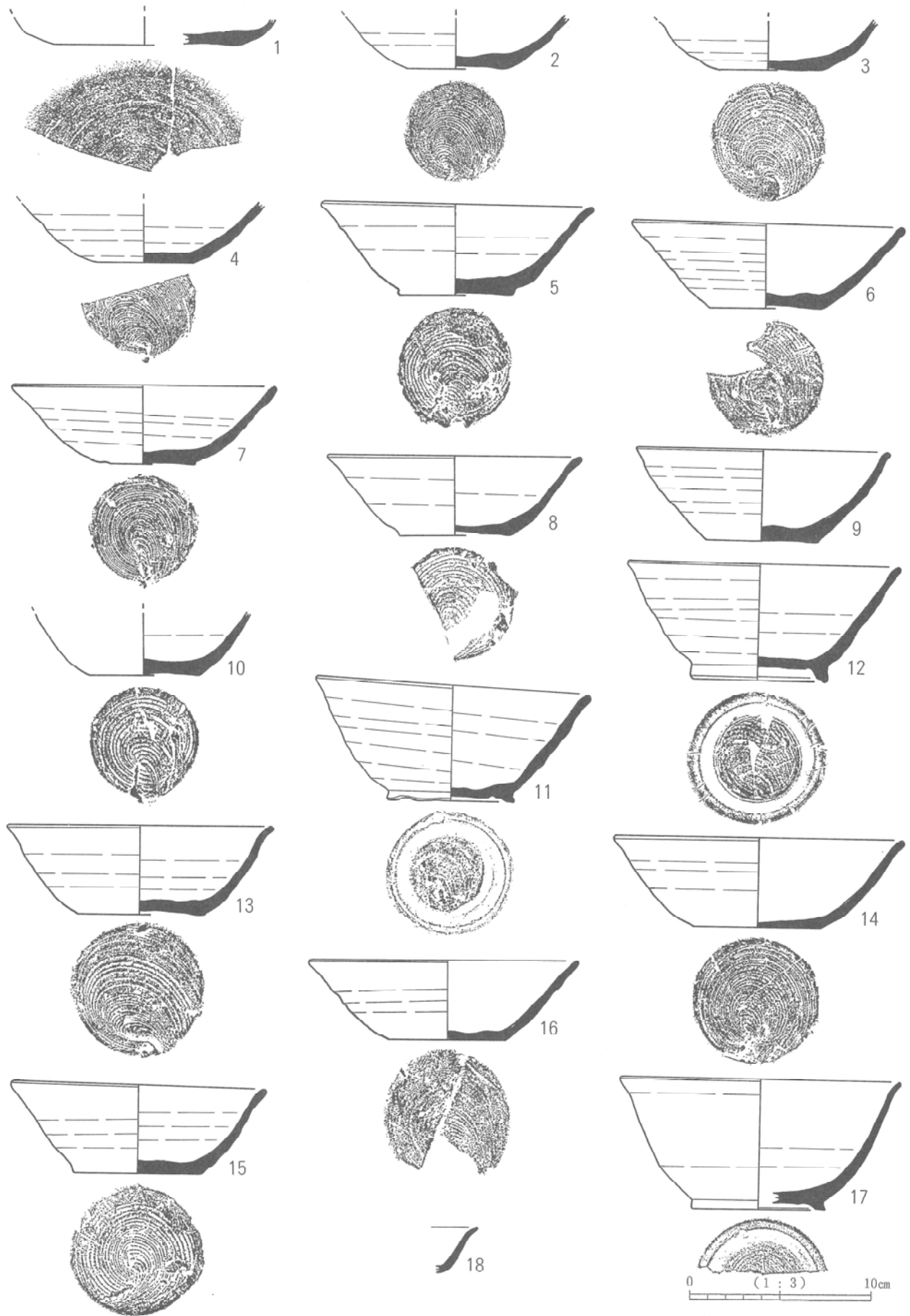


第7図 SD1 遺物出土状況図

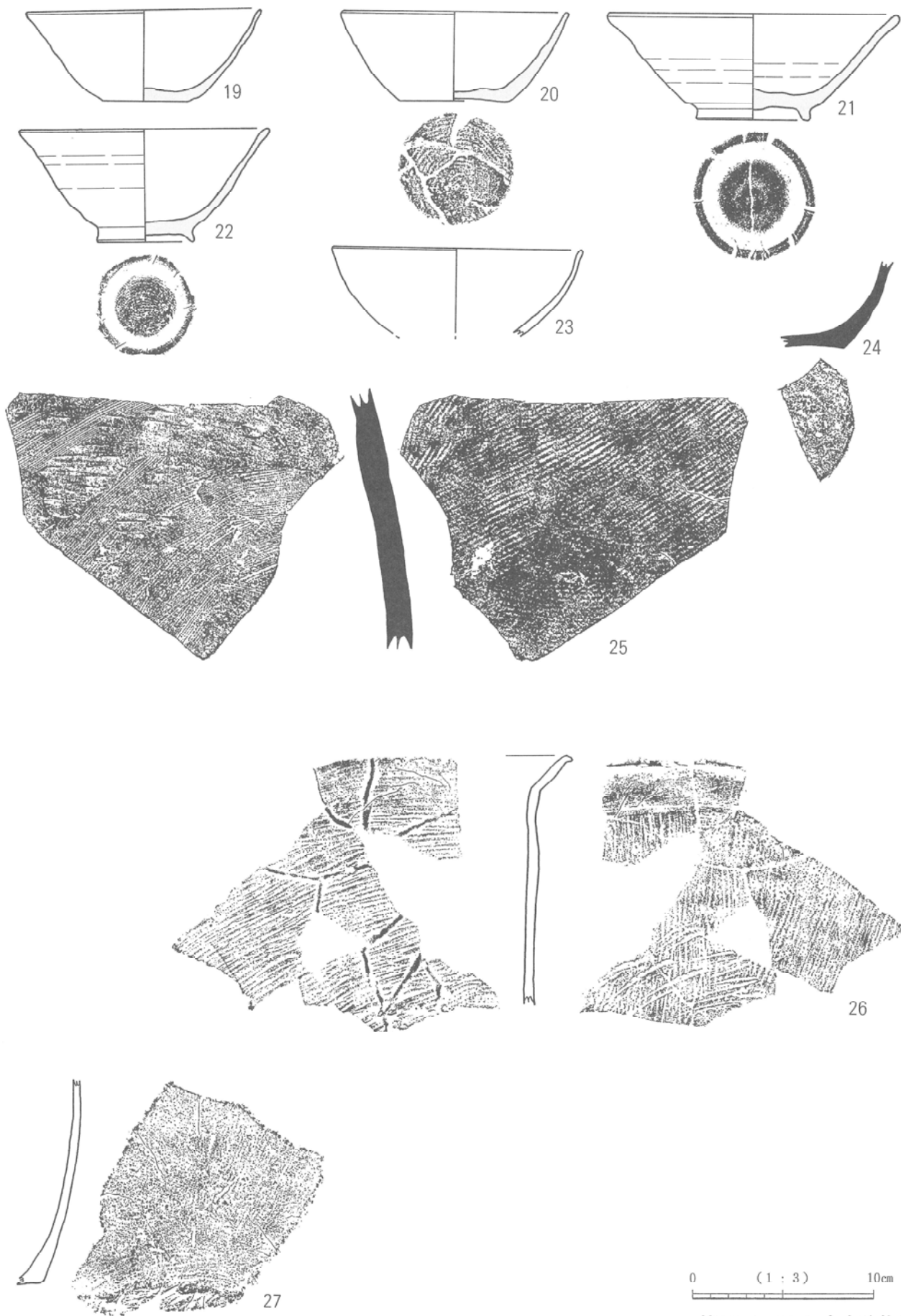


第8図 SD1 断面図

III 検出された遺構と遺物



第9図 SD1 出土遺物(1)



第10図 SD1 出土遺物(2)

表 4 遺物分類表

種別	器種	口縁部～体部形態	底部形態	成形技法	外面調整	内面調整	底部痕跡
Ⅰ：須恵器	A： 平 底 坏	1：体部が直立気味に立ち上がるもの。	平底	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ	a
		2：体部が底部付近から緩やかに内弯しながら立ち上がるもの。体部の傾きが大きく、他の類に比して薄手の作りのもの。					b
		3：底径が大きく、体部が底部から直線的に立ち上がり、口縁部がやや肥厚して外反する。					b
	B： 台 付 坏	4：体部が底部から直線的に立ち上がり、口縁部がやや肥厚して外反する。3類に比して体部の傾きが小さい。	付高台				b
	A： 平 底 坏	5：体部がやや内弯しながら立ち上がり、口縁部がやや外反する。見込み部分が他の類に比してやや大きい。	平底				b
	B： 台 付 坏	6：体部は底部からやや内弯しながら立ち上がり、体部中頃からやや直立気味になり、口縁部がやや外反する。口縁部付近が薄手になる。	付高台				b
	C： 甕	1：長胴甕	平底		ロクロナデ→ ヘラケズリ	e	
	2：大甕	—	輪積み	タタキ	アテ→ハケ目	—	
Ⅱ：土師器	A： 平 底 坏	1：体部は底部から内弯しながら立ち上がり、口縁部がやや肥厚して外反する。	平底	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ	b
		2：体部が底部からやや内弯しながら立ち上がり、口縁部付近がやや薄くなる。他の類に比して器厚が厚い。					b
	B： 台 付 坏	3：体部は、底部から直線的に立ち上がり、口縁部は肥厚してやや外反する。他の類に比して体部の傾きが大きい。	付高台				c
	A： 平 底 坏	4：体部が底部からやや内弯しながら立ち上がり、口縁部が肥厚する。	付高台				b
		5：体部が内弯して、口縁部付近でやや内側に屈曲し直立に立ち上がり、口縁部がやや肥厚し、僅かに外反する。	—				—
	C： 甕	1：長胴甕	平底				輪積み

注1 種別 Ⅰ：須恵器 Ⅱ：土師器

注2 器種 A：平底坏 B：台付坏 C：甕

注3 底部痕跡 a：調整回転ヘラ切り b：無調整回転糸切り c：調整回転糸切り d：編物圧痕 e：不明圧痕

表5 SD1遺物観察表

遺物番号	種別	器種	分類	残存部位	層位	口径	底径	器高	器厚	胎土の混入物	備考	挿図番号	図版番号
1	須恵器	坏	I A1a	底部	F2	—	(100)	—	3	砂	内外面摩滅。	9	5
2	須恵器	坏	I A2b	体部 底部	F1	—	54	—	3	凝灰岩質砂	見込み摩滅。転用硯か？	9	5
3	須恵器	坏	I A2b	体部 底部	F1	—	60	—	4.5		胎土緻密。被熱。	9	5
4	須恵器	坏	I A2b	底部 体部	F1	—	52	—	5	凝灰岩質砂・ 粗砂		9	5
5	須恵器	坏	I A3b	略完形	F1	150	64	62	4	凝灰岩質砂		9	5
6	須恵器	坏	I A3b	略完形	F1	150	62	48	4	凝灰岩質砂		9	5
7	須恵器	坏	I A3b	略完形	F1	145	58	44	4	凝灰岩質砂・ 石英		9	5
8	須恵器	坏	I A3b	略完形	F1	140	62	46	4	凝灰岩質砂		9	5
9	須恵器	坏	I A3b	略完形	F1	(140)	62	50	4	石英	内外面摩滅。	9	5
10	須恵器	坏	I A3b	体部 底部	F1	—	40	—	4	凝灰岩質砂		9	5
11	須恵器	台付坏	I B4b	略完形	F1	152	70	68	5	凝灰岩質砂・ 石英	人為的に破碎しているか？	9	5
12	須恵器	台付坏	I B4b	略完形	F1	151	75	65	4	凝灰岩質砂	底部外面中心に打撃痕？	9	5
13	須恵器	坏	I A5b	略完形	F1	(146)	70	49	4	凝灰岩質砂		9	5
14	須恵器	坏	I A5b	略完形	F1	(160)	70	49	4	凝灰岩質砂・ 石英		9	5
15	須恵器	坏	I A5b	略完形	F1	141	72	51	4	凝灰岩質砂		9	5
16	須恵器	坏	I A5b	略完形	F1	154	64	44	4	凝灰岩質砂・ 砂	内外面摩滅。被熱。	9	5
17	須恵器	台付坏	I B6b	略完形	F1	(144)	(74)	72	4	凝灰岩質砂	被熱。内面に火はね痕。	9	5
18	須恵器	皿？	I	口縁部 体部	F1	—	—	—	4		被熱。外面火はね痕。器 形不明。	9	6
19	土師器 (赤焼土器)	坏	II A1b	略完形	F1	150	46	51	3	凝灰岩質砂・ 砂	内外面摩滅。被熱。	10	5
20	土師器 (赤焼土器)	坏	II A2b	略完形	F1	(126)	60	49	5	凝灰岩質砂・ 雲母・細砂	胎土緻密。内外面摩滅。	10	6
21	土師器 (赤焼土器)	台付坏	II B3c	略完形	F1	(162)	62	63	5	凝灰岩質砂	胎土緻密。	10	6
22	土師器 (赤焼土器)	台付坏	II B4b	略完形	F1	(140)	56	55	4	粗砂	内外面摩滅。	10	6
23	内黒土師器	坏	II AorB5	口縁部 体部	F1	(140)	—	—	3.5	細砂	被熱。	10	6
24	須恵器	甕	I C1e	体部 底部	F1	—	—	—	5	細砂	胎土緻密。	10	6
25	須恵器	甕	I C2	体部	F1	—	—	—	13	凝灰岩質砂・ 石英		10	6
26	土師器	甕	II C1	口縁部 体部	F1	—	—	—	6	雲母・粗砂		10	6
27	土師器	甕	II C1d	体部 底部	F1	—	—	—	5	石英・細砂		10	6

注1 計測値の単位はmmである。

注2 計測値欄の()付き数字は図上復元による推定値を表す。

注3 計測値欄の“—”は、欠損による計測不能を表す。

IV 総括

1 SD1溝跡出土遺物について

SD1溝跡では、何箇所かの遺物集中地点が見られたが、遺物形態分類との相関関係は見出せなかった。ただし、前章でのべたように、垂直分布には、その変遷が観取された。

山形盆地南半でこれまで調査された須恵器窯跡としては、山形市小松原窯跡、寒河江市平野山古窯群、大江町藤田窯跡等があげられる。小松原窯跡は、9世紀第1四半期を主体とする窯跡である。寒河江市平野山古窯群は、これまで数回にわたり調査が実施されており、9世紀第2～3四半期を主体とするものである。藤田窯跡は9世紀第3四半期を主体とするものである。本遺跡出土遺物の須恵器は形態的には、平野山古窯群第12地点及び藤田窯跡出土遺物と近似している。これらの窯跡出土須恵器の胎土は、前者では胎土に海綿骨針の混入が顕著に見られ、後者では海綿骨針は含まないが緻密な胎土を持つといった特徴が見られる。本遺跡出土須恵器では、IA2類においては、非常に緻密な胎土を持ち、海綿骨針を含まないといった特徴をもち、大江町藤田窯跡出土遺物と近似しているようである。IA3～5類においては、あまり緻密でなく、大粒の凝灰岩質砂を含むといった特徴を持ち、小松原窯跡出土遺物と近似した特徴をもつ。

以上のことから、本遺跡出土須恵器は、9世紀第2四半期～第四半期の所産のもので、その胎土の特徴からIA3～5類については本遺跡南西方の山地に点在する平安期の窯跡の可能性が高いと考えられる。本遺跡の出土遺物の年代に帰属する窯跡は見当たらないが、未発見の窯跡が所在するものと判断される。このような胎土の特徴をもつ土器は、馬見ヶ崎川扇状地扇端部附近に所在する遺跡までは確認され、それ以北の遺跡については、やや混在するようである。また、IA2類は、IA3～5類とは産地が異なると推測される。

器種構成では、土師器長胴甕の出土比率がもっとも多く、次いでロクロ成形の土師器坏類、須恵器坏類、須恵器甕類、須恵器蓋類、内黒土師器坏類、内黒土師器甕類、ロクロ成形の土師器甕類と続く。若干の年代幅があり、また、溝跡の出土という点を考慮しなければならないが、須恵器坏蓋類の出土が非常に少なく、ロクロ成形の土師器長胴甕(赤焼土器長胴甕)の出土が全くない。また、山形市域の当該期の出土傾向としては、馬見ヶ崎川下流部、須川下流部においては、タタキ目、アテ痕があり外面にロクロ調整が施される土師器長胴甕(赤焼土器甕)の出土が認められるが、本遺跡においては、全く出土しない。近隣の吉原遺跡群についても、同様の傾向を示している。一方、山形市北部(馬見ヶ崎川下流部、須川下流部)においては、9世紀第2四半期以降は、ロクロ成形の土師器甕が、煮沸用具の主体を占めるようになる。これらのことから大まかな傾向として、市内南部(馬見ヶ崎川上・中流域及び須川上流域)においては、煮沸形態における、所謂赤焼土器の出現が最上川周辺部よりはやや遅れるようである。

2 調査の成果

今回の調査は、東北ミサワホームによる住宅団地造成に伴い実施されたものである。遺跡周辺は、過去に土取り等の地形の改変が行われていたが、溝跡1条が検出され、9世紀中葉～後葉の遺物が出土した。当該時期の遺物は、山形市内において出土例はあまりないが、近年、高速道路建設及びそれに伴う周辺地域の開発により調査により、出土事例が増えつつある。

また、北側に位置する吉原遺跡群は、8世紀末葉～9世紀中葉を主体としており、南方約1kmに位置する成沢西遺跡は、10世紀初頭を主体としている。これらのことから、本遺跡は、吉原遺跡群と成沢西遺跡の中間の時期の所産であり、周辺の集落跡の変遷をたどる一資料となるものである。

SD1溝跡は、その検出位置及び周辺の地形観察から遺跡範囲の南端に位置すると判断され、集落の境界の区画的な機能を有していたと推定される。よって本遺跡の居住域は、調査区内から建物跡等の遺構が全く検出されなかったことから、調査区外北側に位置すると推定される。

また、出土遺物の垂直分布から、SD1溝跡の遺物包含層の形成には何段階かの過程があったと推定され、遺物の産地にも違いが見られるようである。

遺跡周辺は、先述の通り、大規模な土地の改変がなされており、過去において遺跡範囲はさらに広域であったと判断される。現竜山川対岸に位置する吉原遺跡群との関係も視野にいて、周辺地域の集落変遷を考察する必要があるであろう。

参考文献

- 山形市史編さん委員会編 1973 『山形市史』 上巻 山形市
 工藤定雄教授還暦記念会編 1973 『最上川流域の歴史と文化』 工藤定雄教授還暦記念会
 山形県教育委員会 1978 『山形県遺跡地図』 山形県教育委員会
 米地文夫・阿子島功 1982 「Ⅱ 地形分類」『土地分類基本調査 山形』 山形県
 須賀井新人・黒坂広美 1992 『平野山古窯群第12地点遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第178集 山形県教育委員会
 須賀井新人・植松薫彦 1994 『今塚遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査センター調査報告書第7集
 (財)山形県埋蔵文化財センター
 鈴木良仁・須賀井明子 1996 『富山2遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書41集 (財)山形県埋蔵文化財センター
 佐藤庄一・須賀井明子 1998 『平野山古窯群第12地点遺跡第2次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第52集
 (財)山形県埋蔵文化財センター
 阿部明彦・水戸弘美 1999 「山形県の古代土器編年」『第25回古代城柵官衙遺跡検討会資料』 第25回古代城柵官衙遺跡検討会事務局
 植松 薫 2001 「若宮の榎」「吉原Ⅰ遺跡」「吉原Ⅲ遺跡」「吉原Ⅵ遺跡」『山形市埋蔵文化財発掘調査年報－平成5～11年度－』
 山形市教育委員会
 武田和宏 2001 「吉原Ⅱ遺跡」「吉原Ⅳ遺跡」「吉原Ⅴ遺跡」『山形市埋蔵文化財発掘調査年報－平成5～11年度－』山形市教育委員会
 國井 修 2001 「吉原Ⅶ遺跡」『山形市埋蔵文化財発掘調査年報－平成5～11年度－』山形市教育委員会
 國井 修 2001 『中野目Ⅰ遺跡中野目Ⅱ遺跡発掘調査報告書』 山形県山形市埋蔵文化財調査報告書第9集 山形市教育委員会
 植松 薫 2001 『吉原Ⅰ遺跡発掘調査報告書』 山形県山形市埋蔵文化財調査報告書第10集 山形市教育委員会
 植松 薫 2001 『吉原Ⅲ遺跡発掘調査報告書』 山形県山形市埋蔵文化財調査報告書第11集 山形市教育委員会
 阿部明彦 2001 「古代最上郡に於ける9世紀中葉の土器様相－大江町藤田窯跡出土須恵器を通して－」『山形考古』第7巻第1号
 山形考古学会

その他、山形県教育委員会発行の『分布調査報告書』の各集を参考にしたが、紙面の都合上割愛した。ご容赦ねがいたい。

報告書抄録

ふりがな	よしはらなないせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	吉原Ⅶ遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	山形県山形市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第13集							
編著者名	國井 修							
編集機関	山形市教育委員会							
所在地	〒990-8540 山形県山形市旅籠町二丁目3番25号 TEL 023-641-1212							
発行年月日	2002年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
よしはらな 吉原Ⅶ	やまがけん 山形県 やまがたし 山形市 おおあざよしわら 大字吉原 あざさかまき 字坂巻276 他	6201	平成11年度 登録	38度 13分 13秒	140度 3分 40秒	20010702 ～ 20010727	500㎡	(仮称) 坂巻団地 造成工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
吉原Ⅶ	集落跡	平安時代		溝跡1条		土師器(坏・台付 坏・甕) 須恵器(坏・台付 坏・坏蓋・甕)		
								総出土箱数2箱

图 版



調査区遠景（南東から）



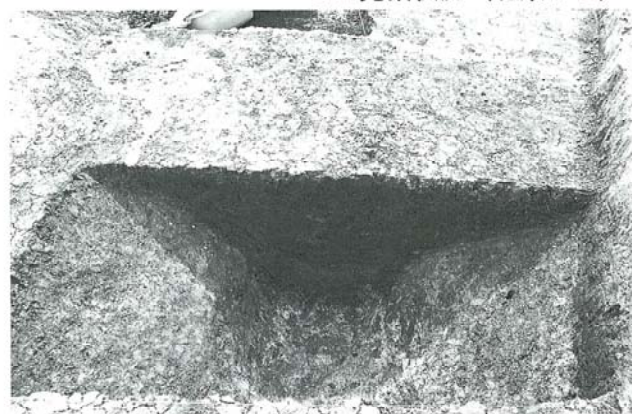
調査区遠景（南西から）



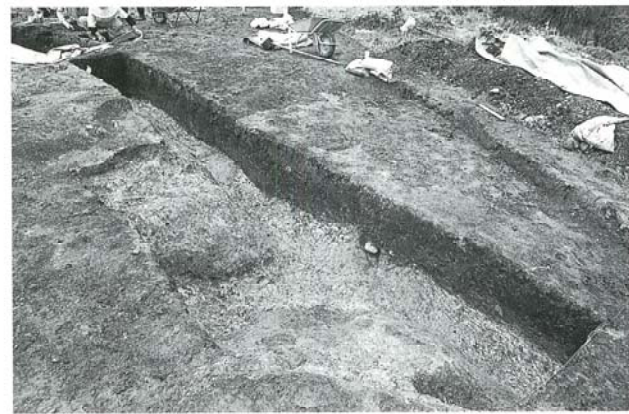
SD1完掘状況（北東から）



SD1 (H-5グリッド) 断面（北東から）



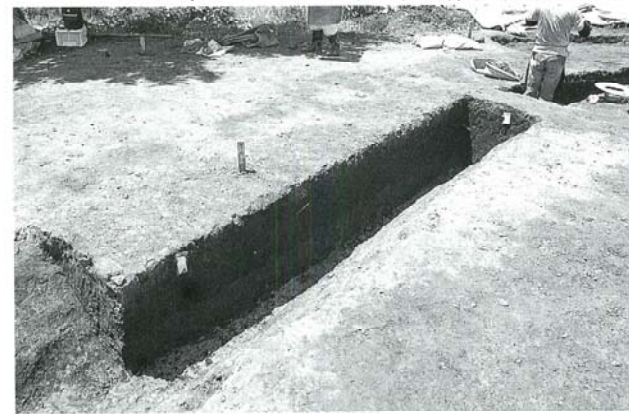
SD1 (H-6グリッド) 断面（西から）



SD1 (H-6・7グリッド) 断面（北西から）



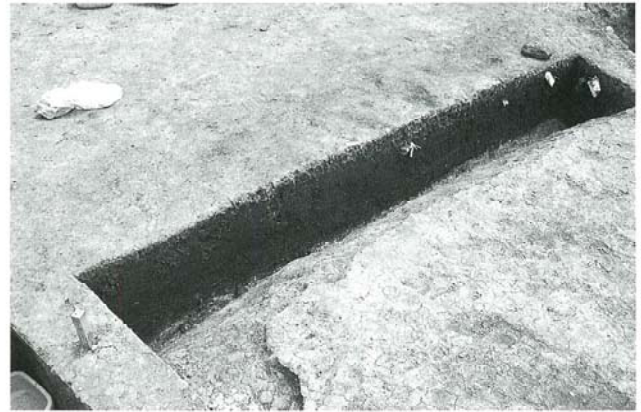
SD1 (H-7グリッド) 断面（西から）



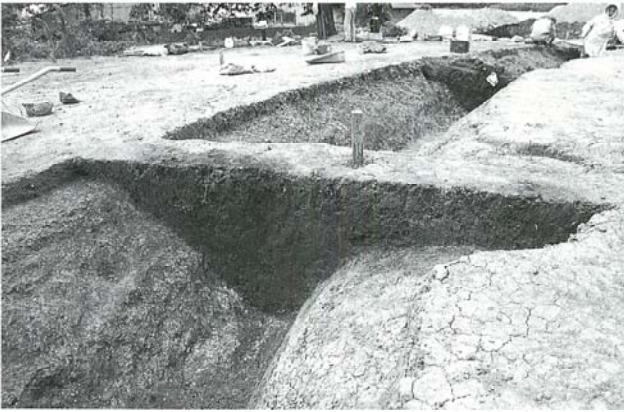
SD1 (H-7グリッド) 断面（北から）



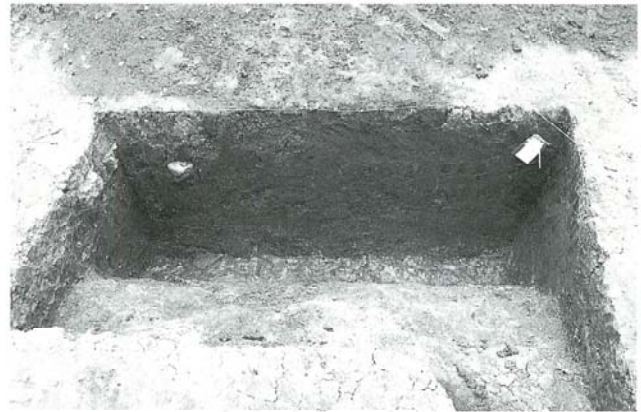
SD1 (G-8グリッド) 断面 (西から)



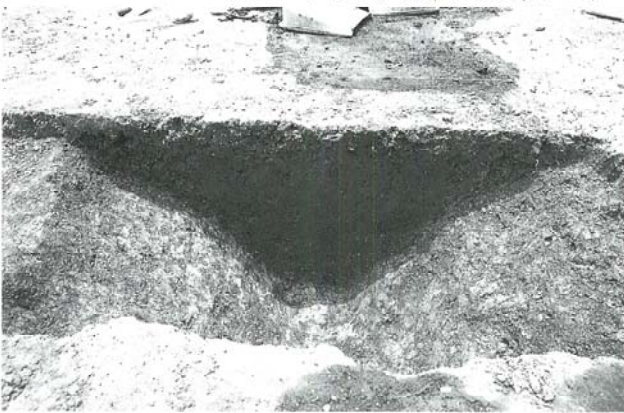
SD1 (G-グリッド) 断面 (北から)



SD1 (G9グリッド) 断面 (北東から)



SD1 (F-9グリッド) 断面 (北西から)



SD1 (F-9グリッド) 断面 (北東から)



SD1 (F-9グリッド) 断面 (西から)



SD1 (H-5グリッド) F1遺物出土状況 (西から)



SD1 (H-6グリッド) F1遺物出土状況 (北東から)



SD1 (H-7グリッド) F1遺物出土状況 (北から)



SD1 (H-7グリッド) F1遺物出土状況 (北東から)



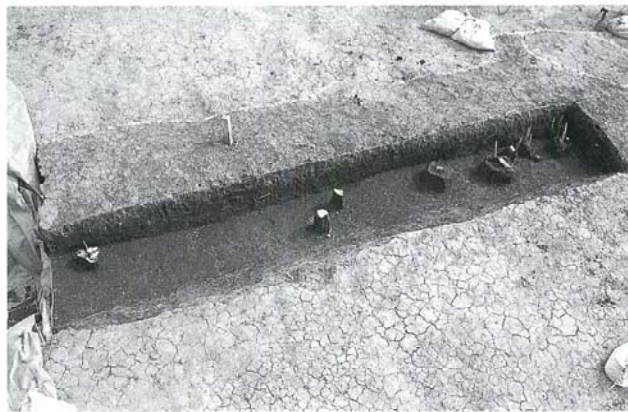
須恵器坏 (5・6) 出土状況 (南から)



SD1 (G-7グリッド) F1遺物出土状況 (北東から)



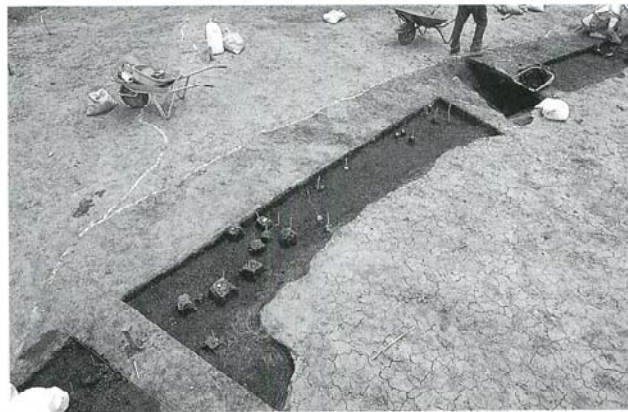
須恵器坏 (17) 出土状況 (北東から)



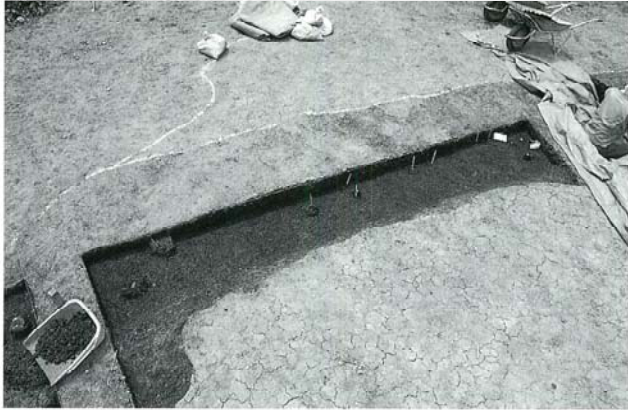
SD1 (G-7グリッド) F1遺物出土状況 (北から)



須恵器坏 (7) 出土状況 (北から)



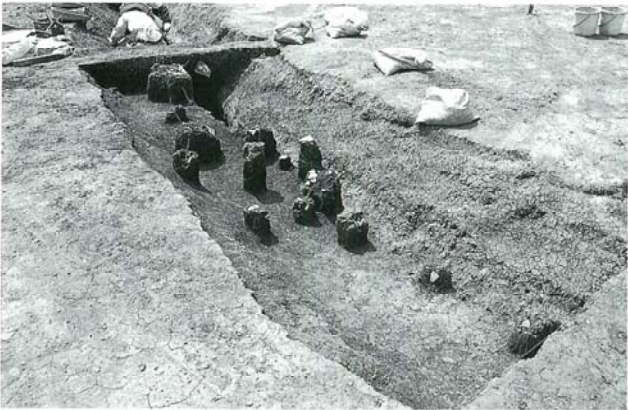
SD1 (G-8グリッド) F1遺物出土状況 (北東から)



SD1 (G-8グリッド) F1遺物出土状況 (北東から)



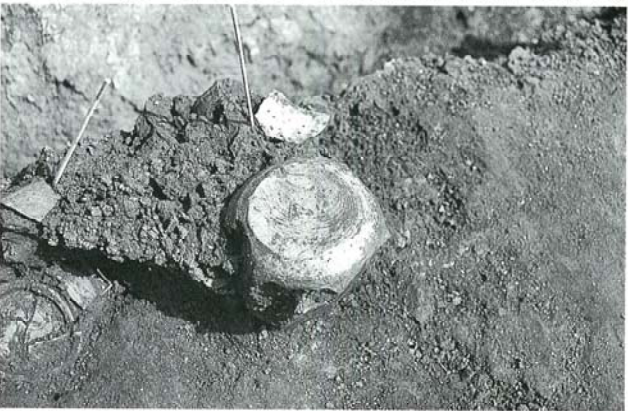
SD1 (G-8グリッド) F1遺物出土状況 (北から)



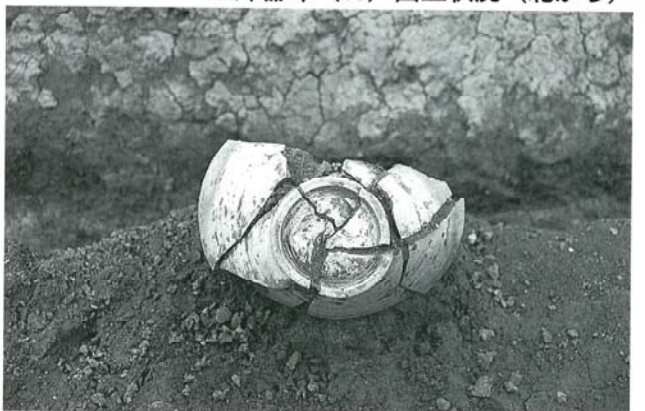
SD1 (G-8グリッド) F1遺物出土状況 (東から)



土師器坏 (19) 出土状況 (北から)



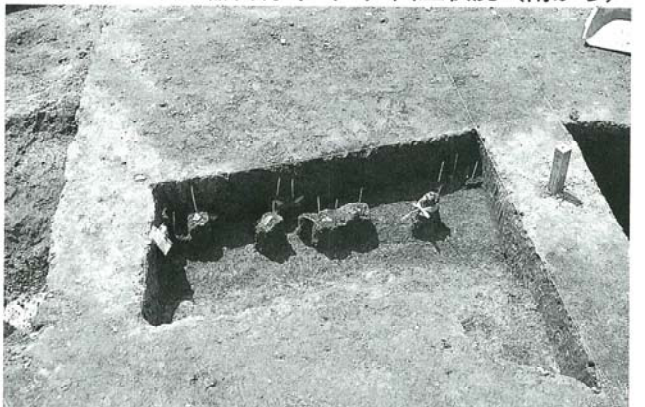
須恵器坏 (13) 出土状況 (南から)



須恵器台付坏 (12) 出土状況 (南から)



SD1 (F-9グリッド) F1遺物出土状況 (北西から)



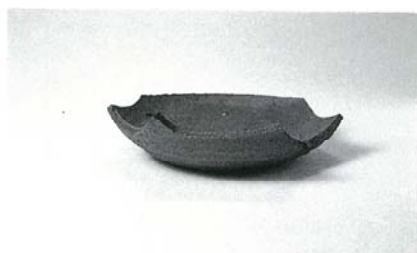
SD1 (F-9グリッド) F1遺物出土状況 (北から)



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



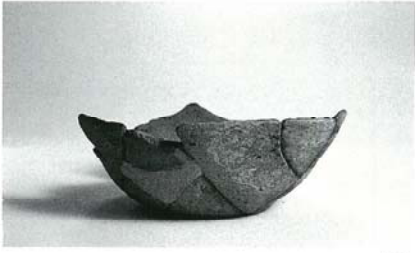
16



17



18



20



21



22



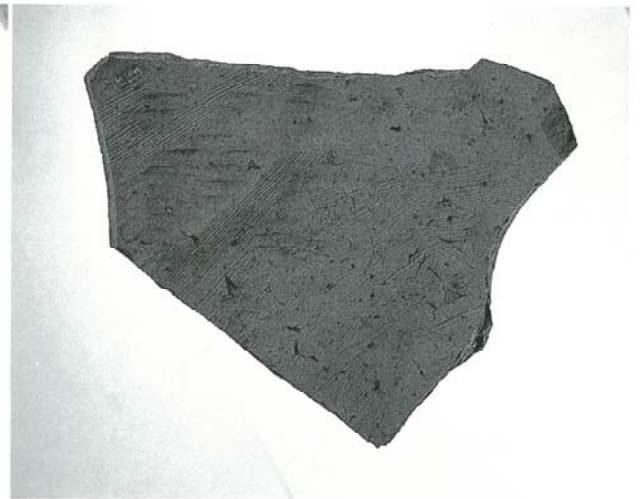
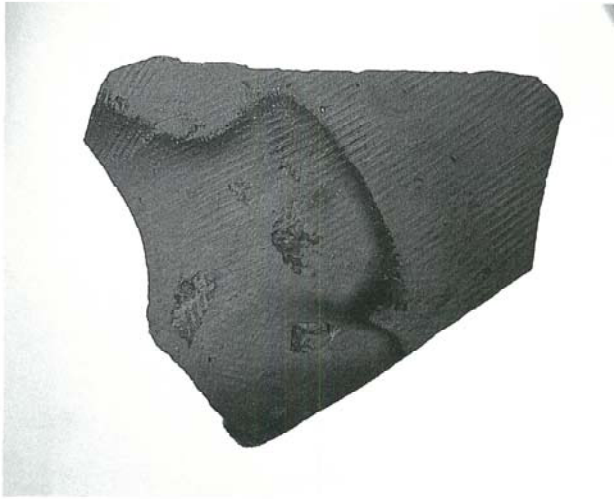
18



23



24



25



26



27

吉原Ⅶ遺跡発掘調査報告書

2002年3月31日発行

発行 東北ミサワホーム株式会社
仙台市青葉区中央一丁目3番1号
Tel 022-724-3301 〒980-0021

松田建設株式会社
上市市弁天一丁目8番23号
Tel 023-672-2131 〒999-3161

山形市教育委員会
山形市旅籠町二丁目3番25号
Tel 023-641-1212 〒990-8540

印刷 田宮印刷株式会社
山形市立谷川三丁目1410番1号
Tel 023-686-6111 〒990-2251
